

69 『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』からみた
十七世紀末におけるわが国の身体観

計良 吉則・酒井 シツ

オランダ通詞の本木良意が、一六八二年頃に翻訳したのが標題の書であり、原書はドイツ人医師レメリンの“Pinax microcosmographicus”である。『解体新書』が出版される約九十年前の事で、わが国で人体解剖が行われる以前の時代である。この訳書を現代医学の立場から、原書と比較することにより、当時のわが国の身体観を知る手がかりにしたいと考えた。

原書の著者 Johann Remmelin は一五八三年ドイツのウルムに生まれ、医学の学位を得た後は、一六一七年までその地で市医をしたが、その間にこの解剖書を書いたとされる。十六世紀のヨーロッパにおいては、依然としてガレノスの影響が根強くみられるが、ドイツは世界に先駆けてヴェサリウス式解剖示説を行った。レメリンの

解剖図もヴェサリウスの、“Fabrica”をもとにして描かれたと考えられる。レメリンの原書は男女を描いた三つの図からなり、紙片が幾重にも貼られていて、めくるとより深層の解剖が見られる仕組みになっている。そして解剖図には符号が付いていて、その部位を説明する解説文が別にある。訳者の本木良意は、当時の長崎奉行の依頼でこの解剖書の翻訳を行ったと推測する。

今回は原書と訳書と比較した結果を報告する。最初に解剖図であるが、第一図から第三図まで共通してみられる特徴は、訳書では顔貌が日本的に描かれ、原図のような筋肉の盛り上がりは全く表現されず、平面的に描かれている。そして体の周囲に配置された各臓器の解剖図は別紙に独立して描かれ、キリスト教的な装飾はすべて省略されている。また、第二図と第三図に共通して、原書にはない上半身に帯状のものが描かれている。さらに、第二図において駆幹部の紙片の裏に「中焦」という文字が記されている。

次に解説文を原書と訳書とで比較すると、対応する項目の数が訳書では少なくなっている。例えば第一図 Fig.

the Aは原書の項目数が五十なのに対して訳書は三十七である。そして原書の解説文が、解剖学的にまとまりのある記述順序になっているのに対して、訳書ではそうした順序は全く無視され、単に頭側から尾側へと順に符号が付けられている。また、「中焦」や「上焦」、「経絡」や「大経」「小経」といった中国医学の用語が頻繁に使用されている。そして、「男女の生殖器の場所」と訳すべきものを「隠し所」、「鼠径部の腺」と訳すべきものを「股のグリグリ」とするなど、卑近な用語を用いての訳語もみられている。

以上から考察すると、十七世紀末のわが国においては、西洋医学を受容する気運は次第に高まりつつあるものの、まだその本質を理解するには至らなかつたと考えられる。当時わが国の医学は、中国医学の影響を強く受けていたが、その概念をそのまま翻訳に転用して解釈している。この姿勢からは、西洋医学と中国医学とは根本的に異なる概念であるということを、理解していなかつたと考えられる。実際、この良意の訳書の真価が世に認められたのは鈴木宗云によってであり、山脇東洋らの

『蔵志』が世に出た十三年後の、一七七二年のことであった。

十七世紀末のわが国においては、依然として中国医学を中心とした伝統的な医学が、大勢をしめていたと考えられ、そうした医学に基づく身体観が主流であったといえる。

(順天堂大学医学部医史学研究室)